令和２年度 第１回 尼崎２１世紀の森づくり協議会　議事録

日時　令和２年10月28日（水）14時00分～15時30分
場所　尼崎ﾘｻｰﾁ・ｲﾝｷｭﾍﾞｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ　２階会議室

■会長による開会の挨拶

本日、尼崎市がＳＤＧｓの資料を配付してくれたが、近年、産業界にも急激にＳＤＧｓが普及している。また先日、京都国立博物館で「博物館とＳＤＧｓ」という題で講演をした。美術館等の担当者が生物多様性ということを言い出した。このような社会が日本に広まっており、それを受けて、我々がどう考えていくのかが課題である。

また、コロナ禍でいろいろなことが起こってきている。「マイクロツーリズム」もそのひとつであり、遠くに行けないが、身近なところを見て回ろうという動きがある。このように近場を家族で楽しもうという動きをどう捉えていくのかが課題である。「タクティカル・プレイス・メイキング」、「タクティカル・アーバニズム」という言葉がアメリカを中心に流行している。「市民が中心となり、提案して、取り敢えずやってみる」というような動きである。コロナ禍にあって、淀川河川敷公園では、市民がフェンスを作って、ソーシャルディスタンスを保ちながらテントを張り、発電機まで用いて犬の品評会を実施していた。これは管理者が発想したのではなく、市民が主体的に提案し、実践する動きになっている。このような動きが広まっていることから、ＳＤＧｓやタクティカルという言葉を足すと、尼崎２１世紀の森の将来が見えてくる気がする。

管理者側の意向ではなく、使う側の提案を生かして、実践してきたのが、尼崎２１世紀の森であり、ＳＤＧｓやタクティカルの先駆けとなっていたと思う。この動きを進めて行けば、日本の公園緑地行政をリードできるのではないかと考える。

■報告事項　「尼崎２１世紀の森構想」の取組状況

○資料説明（事務局）

資料１　「尼崎２１世紀の森構想」の取組状況をもとに、以下の内容を事務局より説明。

1)　尼崎の森中央緑地の整備状況について
2)　令和２年３月以降の主なイベントについて
3)　尼崎の森中央緑地での養蜂について
4)　緑も水辺も育む賞について

○意見交換

委員　：　個人的には、尼崎の森中央緑地での養蜂をぜひ取り組めばよいと思っている。しかしながら反対意見もあり、そのことを知って頂きたいため、あえて発言させていただく。

尼崎の森中央緑地の植物は、在来種、地域のものを使っている。猪名川流域、六甲山系、淡路島を含む海浜から種を採取して、種を育てて苗にし、その苗を植えて森を作っている。

しかし養蜂の主流はセイヨウミツバチであり、外来種のミツバチである。

昆虫を持ち込むことに関して、在来種、外来種に関する明確な取り決めがなく、これから検討する必要があるが、個人的に外来の昆虫を持ち込むことに懸念がある。

このため、養蜂でセイヨウミツバチを持ち込むことに問題点があることをご指摘させていただく。個人的に将来は、セイヨウミツバチからニホンミツバチに切り替えていきたいとの希望もある。つまり、中央緑地の理念に沿って昆虫を持ち込み、養蜂を進めていくのが良いのではないかと考えている。これらは、今後議論していく必要があるが、今回、試験的に実施し、課題を整理するということであるので、見守っていきたいと考えている。

事務局　：　尼崎の森の植物は在来種中心である。養蜂のセイヨウミツバチは実験としてとらえている。現在、中央緑地にはニホンミツバチも飛来している。今後、セイヨウミツバチの影響を観察し、専門家のご意見も伺いながら、「昆虫も在来種でないとだめなのか」、「セイヨウミツバチとニホンミツバチは共存できるのか」など、すぐに結論はでないと思うがセイヨウミツバチの巣箱を置いたことによる影響等を検証していきたい。

会長　　：　兵庫県立淡路景観園芸学校ではＳＤＧｓに関連して、学生がニホンミツバチクラブを作って、巣箱を設置したが、蜂が来ていない状況である。一度、見学に来てください。神戸市の須磨離宮公園や関東など多くの所で養蜂を実施しており、ぜひ参考にして下さい。

■協議事項　（１）森構想エリアでの活動のあり方について

〇資料説明（事務局）

資料２「森構想エリアでの活動のあり方」をもとに、事務局より説明。
引き続き、（株）地域環境計画研究所　若狭代表取締役より説明。

〇森構想エリアで活動する団体について委員から説明

委員　　：　ＳＵＰは、今年度月２回ごみ回収の取組を行った。毎回80kgのごみを回収した。その他には、情報誌Ａａを発行したことや、モルックなどを実施した。

委員　　：　設立以来、森づくりに関わってきた。在来種に関して近郊から種を採り、苗を育て、植樹する、森づくりを中心に活動している。環境体験学習にも力を入れている。100年かかる森づくりは、次世代に引き継いでもらわないといけないので、子どもの頃森づくりに取組んだという思い出が残るような環境学習を目指している。

〇意見交換

委員　　：　コロナ禍で、今年は何もできなかったのが悔しい。モルックを始めた理由は、「生きがい」という英語では一言で説明できない言葉があてはまると考

えている。尼崎２１世紀の森は「生きがい」を見つけやすい場所と感じている。

会長　：　阪神淡路大震災直後、「まちづくり」「里山」という言葉も、市民が主体となって地域を作って行くキーワードとなった。

委員　：　森構想エリアで活動する団体は、定期的に活動している団体が登録されているのか。森構想エリアで活動する団体はもっと多いのでないかと感じている。しかし、リスト化される段階で増えていないように見える。実際は森構想エリアで子どもを集めて毎週活動している団体や、大庄支部が中心となって開催する森の文化祭などでもモルックを実施している団体もある。どのような経緯でリスト化されているのか教えていただきたい。

事務局　：　まず、登録制度はない。また、ご指摘どおり、リスト化された団体が全てではない。常に団体に把握に努めているが、全てを把握することは難しい状況である。

委員　：　活動している団体の情報を県にお伝えすればよいのでしょうか。

事務局　：　プラットホームの森の会議があるので、その会議の場でやりたいことや関係する団体などの情報を教えていただけると助かります。

会長　：　「お伝えする」のではなく、森の会議から登録してもらうほうがいいのでは。

森の会議担当　：　森の会議の参加者は、組織を背負って参加している訳ではなく、色々な組織に所属していても個人として参加されている方が多い。森の会議は出入り自由の場であり、そこでたまたま出会った人との情報交換や紹介などを通じて人と人とを繋ぐ場になっている。このため、登録には違和感がある。

委員　：　私も登録はいらないと思っている。極端にいうと森の会議に出なくてもよいと思う。ただ、団体がリスト化されていたので気になった。

会長　：　最近、県立公園の協議会は、成果事項などの報告会と化しており、その意義が薄れている。協議会は、これから活動しようとする人を応援することや、管理者からダメと言われたことをどう実現するかをみんなで考えてサポートする会議であると考えている。

委員　：　森の会議は何回か参加させていただいた。いい人も多く、それぞれ自立して活動する人が楽しそうに取り組んでおられる。今、尼崎２１世紀の森づくりは途上のため、何らかの形で県・市が関与しているケースが多いが、それが無くなった時、「ゆるやかに連帯していること」や「まずやってみようと

いうタクティカルなノリが伝わっていくこと」が大事と思う。例えば、今回の協議会で資料として整理された内容が後になって伝わることがある。

また、県・市の担当者は何度か現場に来て、実際にやっている人の話を聞いたり、一緒に何か感じたりすることがとても大事である。書類だけでは伝わらないことがある。

委員　：　初めて森の会議に出席したが、川沿いに植込みなどがあってきれいになっており驚いた。

今、中央地域で子どもの居場所づくりを検討している。平日は学校の校舎で、週末は地区会館の建物の中で過ごすので、それであれば、自然に触れさせるために中央緑地に行き、お手伝いなどしたいが可能か。

森の会議担当　：　是非、参加していただきたい。リンリンロードを使えば自転車で安全に来ることができる。また、昔の暮らしを体験する茅葺民家の活用も始まっているので、是非子ども達と遊びに来てください。

■協議事項（２）　森構想エリアでのＳＤＧｓの取組みについて

〇資料説明（事務局）

資料３　「森構想エリアでのＳＤＧｓの取組みについて」をもとに、事務局より資料説明。

〇意見交換

委員　：　森をもっと豊かにできればと考えている。森と海は繋がっている。将来的には、海の生き物を育てるところまでつなげていきたい。森を経て流れ出した水が海に流れることで貝や魚を育てるなど、「森は海の恋人運動」といわれるものを尼崎でも実現したいと思うので、今後の考え方に盛り込んで頂きたい

会長　：　兵庫県立景観園芸学校では、インストラクターが学生と一緒に「ヤギクラブ」、「ミツバチクラブ」などをつくり、楽しみながら活動しており、参考になると思う。面白みを加えるのに、森の会議などで考えてもらってはどうか。

委員　：　目標に対して２１世紀の森エリアで何をしているのかではなく、２１世紀の森エリアでの取組みがどの目標の項目に該当するのか、ということがＳＤＧｓの取組み方ではないかと考えている。貧困やジェンダーに空欄があるからといって、敢えてそれに取り組むようなことにならないようにすべきかと思う。

委員　：　尼崎の森中央緑地は、被災しやすい地区だと思うが、災害への対応はどの程度考えられておられるか。

事務局　：　森というと、台風や大雨で崩れるイメージだと思うが、中央緑地は生活のなかでの利活用を想定した森をイメージしている。災害を抑える、山の木を間伐して防災に資するのではなく、将来的に森が大きくなれば、防風林的な役割を担うかもしれない。

委員　：　災害時に尼崎の森中央緑地は残るのでしょうか。

事務局　：　台風・高潮・津波等の被害が起こる可能性があるが、高潮・津波対策が進んでおり、森全体が浸水したり流されたりという状況は考えにくい。100年たち森が育てば、森があり海があるという暮らしの場になる。

会長　：　里山は30～40年程度で材をとり、攪乱・回復していくサイクルにある。想定外の台風等で倒れる可能性はあるが、それは攪乱が起こったということで、また回復させればよい。尼崎の森は、植林された人工林と異なり混植のため根が同一ではなく、風等には意外に強いのではないか。

事務局　：東委員のご指摘のとおり、何か具体的に取組んだことがＳＤＧｓにつながっていることが必要ですが、事務局では柔軟な発想が困難なため、森の会議などのご協力をいただきたい。

会長　：　空いている枠に対して、指導して埋めていくやり方は面白くない。兵庫県立景観園芸学校では、フラワーポットや防草シートをプラスチック製品から変更している。このような個別の取組みは県・市の業務内で検討するが、市民活動は大きく広い視点で行ってほしい。

　アメリカのコミュニティガーデンでは、都市公園の菜園でホームレスへの食料を生産している。同様の発想で、果樹を街路樹として植栽し、地域の人に果実を供給するのも良いのではないか。先端的な取組みを調べて、森の会議で検討してはどうか。

会長　：10月31日（土）兵庫県立淡路景観園芸学校主催「コロナ禍の公園利用に関する検証報告」、11月７日（土）日本科学未来館・人と自然の博物館・内閣府共催「みどりでつくる、人とまち」、12月13日（日）兵庫県立淡路景観園芸学校　林主任景観園芸専門員「コロナの時にどのような公園の使われ方をしたか」（日・米・台湾）などのセミナーがあり、ＷＥＢで視聴できる。ＳＤＧｓの取り組みなどの参考にしてほしい。

■閉会

以上